



MARUBI

富士吉田市歴史民俗博物館だより

18

2002.3.31

FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY NEWS



結婚披露宴の余興

富士吉田あれこれ

MARUBI14でもっぱら派手だ！と言われている当地の結婚式（披露宴）を紹介しましたが、今回も結婚披露宴に関わる「余興」について紹介します。

現在、どのような結婚披露宴においても親類、友人から歌(謡)や新郎新婦にまつわるエピソードの紹介、お祝いメッセージなどのちょっとした出し物が宴の最中にあることと思います。吉田での結婚披露宴においても同様に出席者からさまざまな催し物が出されます。宴の最初にくる有難くも長〜い祝辞とは別に、これを「余興」と呼んでいます。一般的に余興というものは「行事や宴会等の席で興を添えるために行う演芸など…」との解釈がありますが、当地ではこの余興の内容が非常に趣向を凝らしたものとなっています。

余興は、通常友人・知人や職場関係から構成される仲間集団によっ

イチツレの余興

て実演されます。内容は、寸劇・演奏・カラオケ・ダンス・衣装などが組み合わされ色々なパターンとなります。そして本来ならば新郎新婦を前にして実演するものなのですが、この余興の場合は、お色直しの間を見計ってスケジュールが組まれているため、新郎新婦を祝い、そして観てもらうものではなく、主役が中座している間の「場つなぎ」的な性格となっています。各余興の持ち時間は約15～20分ですが、少なくとも4つ以上の余興が組まれているのが一般的なので、それだけでも結構な時間となります。お色直しの回数が増えたり、列席者数（仲間集団の人数）によって余興の数も必然的に多くなります。式場の都合(制限)にもよりますが、披露宴が3～4時間と長くなる要因の一端であるともいえます。

現在ではこのようなかたちで進められる披露宴ですが、旧来の式では

どのように執りおこなわれていたのでしょうか。まだ各家で式が執りおこなわれていた頃、盃事に伴う謡曲(高砂、等)が唄われていました。そのなかで謡曲の役や式進行役の下働き役を担うものがイチツレでした。イチツレとは「一連れ」のことで婿の親友をいい、友人のなかでも特に親しい関係の人を指します。謡曲が極めて盛んであった新倉や明見方面では、式そのものが謡曲とともに進行していたこともあり、多い場合には盃一献ごとに謡曲が唄われ、全体で七献分の謡曲が唄われたといわれています。謡曲は鞍馬天狗や蓬萊山といったもので蓬萊山は婿のイチツレ二人が務め、一人が蓬萊山の飾り物を持ち、もう一人が盃の膳を持って唄いながら部屋に入るといったものでした。また、この地域で盃の注ぎ手のことを指す注ぎ手、注ぎ手、注ぎ手別のイチツレが担っていました。

このように式を進行させていく上でイチツレの協力は無くてはならないものでした。こういった昔ながらの謡が現在の披露宴における余興というものに少なからず繋がっているように感じます。

友人達が一所懸命に練習を繰り返してその成果を発表する余興、こうした練習を通して新たな出会いが生まれ、縁結びのきっかけともなるようです。現在でも向原地区では「顔合せ」と称して事前に新郎新婦の友人が集まり、ちょっとした宴会を開きます。この場合、同じ余興の打合せではないので習俗的な「合コン」となっています。そして残念ながら新郎新婦がリアルタイムで余興を観ることはできませんが、今では式場によるビデオ製作が一般的のため、新居につくってから友人達の奮闘振りやゆっく〜楽しむそうです。

(学芸員 布施光敏)

一合目の再発掘

平成8年度から「歴史の道整備活用推進事業」で富士山吉田口(北口)登山道の調査・整備を進めてき

古道の発見

平成8年に実施した発掘調査では、これまで明確にされていなかった鈴原社に向かって直登する旧登山道が確認されました。旧登山道は、石碑の設置されていた平坦面に登り上げる部分の傾斜がとても急なため、木製の階段が設けられていたことが明治大正期に写された写真から判ります。発掘調査では明確な階段の痕跡はみつきりませんが、階段に使用されたと考えられる腐食した木材が一部発見されました。また、道の肩には石が2mほどの長さで左右1列ずつ並べられており、当時の道幅

茶屋跡の調査

鈴原社の前には昭和30年代後半くらいまで茶屋が建てられました。この茶屋では焼印を施したり、お茶を出したりする登山者の休憩所としての性格を持つ施設でした。前回の調査ではこの茶屋の礎石を見つけ出し、小屋の規模を確認するまでに止まりましたが、今回の調査ではさらに下に掘り進め古い遺構の有無を確認しました。

ました。MARUBI 8,10,12では「馬返」、「一合目」の発掘調査の概要を報告してきましたが、今回は13年度に再調査を実施した一合目の調査概要について紹介しま

が確認できました。この石列の東側には天保10年(1839)の富士信仰碑が1基確認されています。

社前面の平坦地には富士信仰碑が並べられていました。これらの石碑は台石がコンクリートによって固められており、昭和50年代に倒壊していたものを便宜的に並べ替えたものでした。この一時的な修繕によって碑の原位置がわからなくなりましたが、発掘調査によって6基の台石が出土したことから約半数の石碑の位置を特定することができました。

また、道沿いにあった茶屋跡が多量の遺物とともに明らかになりました。

この茶屋跡の北側には富士信仰碑の台石を転用して縁石に再利用してありました。まず、この縁石や礎石を取り外しながら全体的に掘り下げをおこないました。縁石の裏側には裏込めに用いられた20cm大の石が詰められていました。この茶屋は平坦に造成された面に建てていましたが、掘り下げた結果、茶屋以前の土地は北側に向かって緩やかな傾斜をもつように造

す。

この再調査は平成13年度におこなう一合目整備に向けて実施しました。今回の調査では、前回実施できなかった茶屋跡の下部を掘

り下げて、さらに古い遺構を確認すること、そして再設置された石碑の下部に鳥居などの遺構が残されているかどうかを明らかにすることを目的として実施しました。



平成13年度調査風景

成されていることがわかりました。この傾斜の落ち込む付近から北側では、柱跡と考えられる木材が東西方向に6基発見されました。この柱跡は一つを除いて一間(181cm)間隔で残されており、高さもつりあうことから何らかの施設にともなうものと考えられます。

「富士山明細図」・「富士山真景之図」(ともに江戸後期)などの絵図には小屋が描かれています。これらの柱跡が江戸時代の小屋跡

の可能性も考えられますが、南北方向で同様の柱跡が確認されなかったため、現時点ではその特定はできません。この柱跡の付近では炭も多く見つっています。また、地面で直接火を焚いたためできた赤く焼けた土も確認されています。このような焼け土が所々で見つかり、その範囲は明確なものではありませんが、穴状に少し掘り込まれ5cmほど堆積がみられる所もありました。



柱跡



焼土跡

柱跡の一つからは多量に銭貨が出土しました。そのほとんどが鉄銭で腐食が激しく、破片になって

いるためお金の種類は特定できていません。この鉄銭の他に3枚の銅銭もあわせて出土しています。



柱跡とお金の集中箇所

これらの銭貨が最も集中して出土した部分では40cm四方の平たい石が置かれており、3枚の銅銭はこの石の直上から出土しています。今後、検討を加えるなかでこの銭貨と柱跡、そして焼土との関連を調べていきます。

この茶屋跡の調査では遺物も多く出土しています。なかでも陶磁器類が多く、他に銭貨（主に寛永通寶）釘などの鉄製品が発見されました。陶磁器がもっとも多く出土したところは柱跡が確認された南側で、坑状に70cmほど掘り込まれた中から比較的多く出土しています。この掘り込みからも炭が多くみられました。必要でなくなった物を廃棄した所かもしれません。



出土した陶磁器類

富士信仰碑の下には...?

一合目には計15基の富士信仰碑が存在します。そのうち江戸時代のものが9基、明治・大正時代のものが3基、時期不明が3基となっています。前回の調査では石碑の下部は台石がコンクリートの基礎によって固められていたため、調査をおこなうことができませんでしたが、今回、一合目の整備にあわせて移設がおこなわれるため、碑の撤去に際してその下部を調査することができました。

当初、この東西横一列に並ぶ石碑の直線上に古写真に写されている木製鳥居の痕跡が確認できる可能性があると考えていました。コンクリートの基礎を外して70cmほど掘り下げたところ、スコリアの層にあたってしまい、鳥居の痕跡はおろか何の遺構も見つけることはできませんでした。掘削時に銭貨が数点出土したのみでした。



明治末期の一合目

一石経の再確認

前回の調査で一石経が確認されましたが、小屋の縁石にかかるためその全体を調査することができませんでした。今回の追加調査によって170cm四方で深さ60cmの掘り込みのなかに約6～7万個ほどの石を埋納したものであることが明らかになりました。前回の調査報告で、石には法華経の経典を書したものであることがわかっ

ています。今回の調査でもこれにともなう経碑は確認できませんでしたが、碑の一部ではないかと推察される石材片が出土しています。今後の調べによっては、この経塚の成立時期などが解るかもしれません。



一石経の再確認

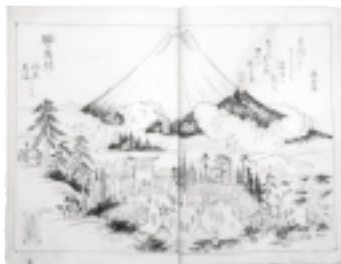
整備の指針

平成10～13年度にかけて馬返と一合目の保存整備事業が概ね完成を迎えました。今回は整備によって生まれ変わった登山道の状況を紹介します。

整備の方針については、まず時代の設定という点が問題となってきます。登山道は富士山登拝の道ということが重要なため、基本的に最も盛んであった江戸時代の景観を再現することを目標としました。しかしながら、近代以降も登

山道の利用がなされているため歴史の積み重ねがあります。これらも富士山にとっては重要な歴史の一つであり、景観上どうしても整合性が取れないものを除いて可能な限り現状を残す方向で整備をおこないました。

また、遺構は埋め戻して保存をおこない、石垣、石段、石畳といった構築物などは新規に遺構を作り上げるのではなく、現状を修復した状態で利活用を図ることとしました。



馬返/「富士山真景之図」

馬返の整備

古道の復活

それまでの登山道は県道であるため発掘調査によって確認できた古い道をそのまま復元することはできませんでした。山梨県との協議を重ねた結果、従来の県道を付け替えることが認められ旧来の登山道を復元することができました。

この整備でもっとも難しかったのは多量に流れる雨水の処理でした。流されやすいスコリア質の道は少し雨が降っただけでも20～30cmほど簡単に決られてしまいま

す。これが大雨になると道そのものが川になってしまい、いくら土を足して踏み固めても路面を維持することができません。雨水の処理に関してはさまざまな意見がありましたが、検討を重ねた結果、特に雨水が多く流れるこの旧登山道部分の路面を舗装し雨水をそのまま流すという排水路を兼ねて道を維持する方法で施工しました。この場合、文化財の工事であるため舗装といっても道路に使用されるアスファルトではなく、火山灰を樹脂で固めた「樹脂舗装」としました。市街地とは異なる厳しい

気候条件の登山道にあって、どのくらいの耐久性があるのか富士山のような高冷地での事例がほとんどないため、今後の維持管理を慎重にしていかなければなりません。

路面を舗装するにあたって周囲景観の整備もおこなっています。整備以前では路面そのものが2m近く雨水により決られている部分もあるため各所に盛土をして修景をしました。付け替え以前の県道部分も雨水の流路にならないように土を入れ込みました。そして盛土の法面などが崩れないように植栽ネット（自然分解するもの）を貼

り、土砂の流出を防ぐとともに緑化の補助をおこないました。このネットには種子と肥料が入れ込んであります。高冷地ということもあり種子の候補があまりなく、加えて富士山の植生に影響を及ぼす種を導入させたくないこともあり、周辺地域4種の在来種を用いました。

また、この登山道には灯籠までの間、傾斜がきつくなるところがあるため階段を設けています。階段は木製で腐りにくい素材を使用しました。



整備前の登山道



整備後の登山道

石垣・石段・石畳の修繕

石垣、石段、石畳は、現状を修復して活用するために調査と並行して解体をおこない、積み直しお



調査時の石垣と石段

よび敷き直しをしました。石一つ一つに番号を付し、もとの組合せに戻るよう作業を進めました。

道の両側に積み残された石垣は、全体的に積み方が不安定で弱くなっており、孕んだ状態にありました。特に東側部分は崩落によって石材が流失し、不足している部分があるため新補材を補充し、安定した状態に復元しました。

石段は3～4個の長方形の切石が組み合わされたものでした。地盤が傾斜方向へズレたため、中央の階段石が飛び出した状態になっていました。地が滑りやすいスコリアそのものであったため、粘性の高い土を補充しながら階段石を組み直ししました。踏面に敷かれていた平たい石も同様に敷き直しをおこないました。

石畳も同様に石の敷き直しをおこない、流失した部分については同じ石材で新補材を製作し補填しました。



整備後

石造鳥居の修繕

文政9年(1826)に建てられた石造鳥居は、柱だけを残した状態で半倒壊しており、基石も石造物の台座が転用された状態でした。整備ではまず、鳥居の柱を抜き取ることから始めました。台座は柱を入れるために穴があけられモルタルで接着されていたため銘の入っている台座は割らなければなりません。抜き取った柱や笠・貫などの出土材は、欠損した部分を補うことと新補として組み込む石

材の調整のために173年ぶりに山から下りることとなりました。汚れを落としたり石材は、見違えるほど綺麗になりました。これら鳥居の石材は、搬入の際に傷や欠損



調査時の鳥居

のないように重機を使う一方で昔ながらの方法も取り入れながらおこないました。

鳥居の重さを支える基礎は、かなりしっかりとしたものでしたが礎



鳥居の組み付け

盤が不安定なためそのものを使用して柱を建てることができず、その上部に新たな基石を製作して柱を立ち上げました。



修復された鳥居

猿像

石造鳥居の周辺からは猿の石像物が見つかっています。猿は富士山の「湧出」が申の日であったという言い伝えから庚申信仰と結びつき、富士山の使いとして認識され、江戸時代からお札などに描かれています。このような経緯から猿が奉納されたものと考えられます。猿像は大きさの違う2種類のものが確認されました。1つは頸から頭部が欠けた上半身部分で手が合掌した状態のものです。もう一つは腰から下の下半身部分で、岩座に腰掛けた状態のものです。この2つの像は使用されている石材(ともに安山岩)の質に違いがあり、上半身部分には見られない毛彫りの彫刻が下半身部分には施されていました。「富士山真景之図」

によると鳥居の前면에一對のものが描かれています。実際に調査において鳥居の前に残されていた一對の礎盤と鳥居の基石として転用された台石が組み合わさることからその上に置かれていたと考えられます。この台石の大きさからすると下半身部分の像では台が小さいため大きさの合致する上半身部分が置れていたと推察できます。

形状や寸法、そして牛玉札から猿



猿像の上半身

像の復元をこころみましたが、遺存しているものは風化が著しいこともあり、そのものをを用いた修復復元は困難でした。そのため形状と寸法をもとに新規に製作をおこないました。前述のように頸から頭部は欠損していましたがで頸のサイズから頭部全体を作っけいき表面は推定での復元となりました。

この猿像の復元については、残されている部分の情報では足りなかつ



復元された猿像

ため牛玉札に描かれている情報も加えて製作しました。牛玉札では一対もしくは複数の猿がみられます。そこに描かれている猿の多くは、富士山を拜むように手を合掌しており、足を前後させ向い合うように描かれています。また、狼犬のように「阿吽」の状態で描かれているものもあります。これらの猿を参考にして足の向きや口元などを微妙に変化させて像の製作をおこないました。



牛玉札に描かれた猿

富士信仰碑の移設

馬返に奉納された富士信仰碑は計27基(玉垣を除く)あり、そのほとんどが再設置もしくは倒れた状態で本来の位置から動いているものでした。これら石碑の整備については発掘調査で発見された2基の台石と明治・大正期の写真資料を参考に移設をおこないました。



修復前の灯籠

入口にあたる大型の灯籠は道を挟んで東西に置かれています。西側は火袋や台石が欠けていて高さが揃っていませんでした。この火袋の一部が見つかったのですが、使用することができないため新補材を用いて製作をおこないました。また、台石も山小屋の縁石などに転用されており、風化や欠損、そして正確な組合せを見つけることが困難なため新規の補充となりました。設置場所に関しては本来の位置から大きなズレはほとんどないため、当時の遺構を参考に修正をおこないました。



修復後の灯籠



明治末期の馬返/WALTER WESTONコレクション

多くの石碑は東側の段上に一列に並べられていたことが写真資料から読みとれます。(写真上)。発掘調査において確認された台石(根石)の位置と写真で読みとれる石碑の形状(頂部の形)寸法(幅や高さ)といった情報から石碑の位置や並びを考えました。また、石碑の中には台石が失われているもの、碑の部分のみ残されているものなどがあります。これらは他の石碑の台石との割合を比較して新たに石材を補充しました。石碑は写真資料で確認できる個体数と一致しており、全ての碑を設置することができました。

他の石材として2種類の灯籠の棹石が残されています。一つは入

口の灯籠のものよりもかなり大型のもので、これに伴うと考えられる笠石が残されているのみで他の石材は消失しています。設置されていた位置も全く不明なため、復原はできませんでした。もう一つは一对分の棹石が残されているもので、絵図に描かれている鳥居前

面に位置していたものと考えられます。この棹石は各所に亀裂が入り、耐久性がなかったためそのまま使用することができませんでした。そのためこの棹石の寸法を基準に入口の灯籠の形式を取り入れ、標準的な寸法割合で新規に製作をおこないました。



調査時の旧登山道



整備後の富士信仰碑

よみがえる登山道 - 保存整備事業の概要

一合目の整備

古道の復原

旧来の登山道は実際に歩くことができるように整備をおこないました。社に向かって真直ぐに登り上げる登山道は、傾斜がきつくなる部分に階段を設けました。この箇所はかつて実際に階段が設けられていたことが絵図や写真資料から確認できます。階段は木製で馬返で使用したものと同じ素材を用



発掘された旧登山道

いましたが、路面そのものは舗装をおこないませんでした。この部分では雨水の流路となっていないので馬返のように大がかりな水処理の必要がなく、粘性土による叩き締めをおこない自然な道造ることができました。

また、道肩の法面には地盤が崩れないよう安定させるために馬返で施工したものと同等の植栽ネットを施しています。



整備後の登山道



一合目鈴原/「富士山真景之図」

遺構の保存と富士信仰碑

この平坦地を整備するにあたり、遺構の保存と修景を目的に盛土をおこない、まず地盤を安定させる作業をしました。調査によって確認された6基の台石や一石経その他の遺構はすべて埋設保存とし、盛土の上に整備をおこなっていきま

した。石碑は計15基あり、出土した台石と明治期の写真資料をもとに石造物の配置を考えていきました。8基分の石碑は発掘された台石の寸法や写真で読みとれる碑の形状からほぼ本来の位置に戻すことができました。残りの石碑は奉納された年代を考慮しながら絵図などの情報をもとに設置しました。そのうち江戸期に作られた3基分は、ちょうど階段を登り上げた箇所に左右へ振り分けて設置しました。位置が特定できない残りの石

碑(道標を含ま)、遺構が遺されている柱跡や一石経の出土した西側部分を避けて東側の原位置に戻した石碑の前面に設置しました。

石碑の他は社への階段として5段の石段を設けました。絵図では確認できませんが、P3の古写真では階段が設けられていることがわかります。鈴原社の雨落ちに切石が敷かれており、この石材は階段石を転用したものと考えられます。この切石はちょうど段石としての蹴上げと踏面にあたる2面が加工されており、寸法的にも合致することから階段の石材として使われていたことがわかります。この石材で石段を組むことは困難なことから新規に製作をしました。

今後の整備の展開によって一合目のサインなどの標示をおこなっていく予定です。また、木造鳥居は今回の整備では取り組むことが

できませんでしたが寸法等の記録類が残されていることと写真資料からその形状を特定できるため復原は十分可能となっています。



石碑撤去後の調査風景



整備された富士信仰碑

おわりに

登山道の整備を通して多くのことを学ぶことができました。現代の発達した材料や建設機械のない時代、山深い中で重量のある石材の搬入・組み付ける作業をおこなっていたことにとっても感心させられます。当時の人々が持っていた信仰の力強さが残された石碑や塚のものから感じ取ることができました。

今後も登山道に関わる調査等を進めていき、富士山の歴史そのものを体感できるように整備にむけて取り組んでいきたいと考えます。

1：平成14年3月現在、馬返～一合目間の旧登山道は繋がっていません

おもな資料及び参考文献

- 『富士山吉田口登山道開通遺跡』富士吉田市文化財調査報告書第3集
- 『富士山の絵札』富士吉田市歴史民俗博物館企画展図録
- 『P6の古写真』イタリア国立山岳博物館提供/Museo Nazionale della Montagna Torino (Italia)

【学芸員 布施光敏】



博物館からのお知らせ

インターネットホームページのアドレスを変更しました

旧URL <http://www.mfi.or.jp/marubi/>

新URL <http://www.city.fujiyoshida.yamanashi.jp/info/div/hakubutsu/html/index.htm>

旧E-Mail marubi@mfi.or.jp

新E-Mail hakubutsu@city.fujiyoshida.yamanashi.jp

登録いただいている方はお手数ですが上記のアドレスに変更ください。

平成13年度寄託・寄贈資料

平成13年度に博物館へ寄託・寄贈していただいた資料を紹介します。ご協力ありがとうございました。

寄託資料

・北口本宮富士浅間神社「掛軸」他……………計7点

寄贈資料

- ・羽田 志ずえ「ホーコウ」……………計1点
- ・宮下 吉秋「古写真(コピー)」……………計7点
- ・宮下 功「古写真(コピー)」……………計6点
- ・武藤 せい「着物」……………計3点
- ・田辺 四郎「御影神輿台」他……………計16点
- ・桑原 孝輝「杼」他……………計8点
- ・渡辺 一枝「三味線」……………計1点
- ・奥脇 京子「機織道具一式」……………計1点
- ・富士吉田市 観光協会「開山式絵馬」……………計13点
- ・北口本宮富士浅間神社「開山式絵馬」他……………計22点〔順不同、敬称略〕

富士吉田市歴史民俗博物館 FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY

ご案内

開館時間 / 午前9:30～午後5:00(午後4:30迄入館可)

休館日 / 月曜日(祝日を除く)、祝日の翌日(日曜

・祝日を除く)、12月28日～翌1月3日

観覧料 / 大人 300円(団体 240円) / 団体割引は
小中高生 150円(団体 120円) / 20名以上適用

交通案内 / 中央自動車道河口湖ICより車で10分
富士急行線富士吉田駅より山中湖方面
バス15分、サンパークふじ下車



タイトルの「MARUBI」は富士山から流れ出た溶岩台地一帯を指すこの地方のことは「丸尾」からとったもので、丸尾とは溶岩が流れ出る様子の「転び」が転化(変化)したものとわれています。